

会津地域の造林技術改善に関する研究

◇はじめに

会津地域の民有林面積は238千haで本県の民有林面積の42%におよんでいるが、人工林面積は今だに約45千ha、人工林率19%弱という現状である。従って、会津地域の人工林を増大させ、しかも安定した林業経営ができるようにするためには、造林技術上の多くの問題点を解明する必要がある。また、県林業技術開発推進会議でも同じ趣旨の問題が提起され、ここに研究課題として採択され実施されたものである。

この研究は、「造林技術の改善」という課題名が示すように、造林技術上の問題点をとらえては調査研究を行い、問題点を解明して会津地域の造林技術の改善に資することを目的としている。従って、すべての課題（小課題）が1～2年間の調査研究で終了という形になっている。これまで10課題について調査研究が行われたが、その内容は次のとおりである。

1. 造林技術上の問題点把握

育林部長 平 川 昇

I 目 的

会津地域における造林技術の改善に資するため、造林技術上の問題点把握を目的とする。

II 調査方法

会津地方における昭和55年度の事業主体別造林面積をみると、全造林面積1,067haのうち公社造林は46.9%、一般造林35.2%となっており、公社造林の占める割合が最も多い。当初は、森林所有者、森林組合、林業事務所、林業公社等の関係者による検討会を計画していたが、都合により、造林推進に大きな役割を果たしている林業公社職員と、現場の技術指導者である林業改良指導員を中心に、会津地域の各林業事務所において検討会を開催し問題点の抽出把握を行った。

Ⅲ 結 果

検討会において出された100点以上の問題点（話題）のうち、主なものを列記すると次のとおりである。

- 林業経営目標は、良質材生産か大径材生産（備蓄林）か明確にする必要がある。
- 企業経営として造林を考えるのは、問題である。
- 公社等の大面積造林が主流をなしているが、小規模林家の造林を考え、技術指導すべきである。
- 何と言っても雪が大きな要因であるので、春先消雪状態を見て適地を判定すべきである。
- 傾斜方位によってアカマツの生育の良い所もあるが、一般にアカマツ造林は難しい。
- 場所によっては、そのまま広葉樹を残し、活用を図るべきである。
- 契約上全面造林しなければならないので、スギの造林不適地に造林できる樹種は無いのか。
- クリ・イヌエンジュ・ホオノキ等の広葉樹の造林は考えられないか。
- 苗木は裏系のものであれば問題はない。地元の母樹林からのさし木苗養生を考えるべきである。
- 品種も経営目標に合せたもの、すなわち長伐期施業では大器晩成型のものが必要である。
- 飯豊スギ・吾妻スギ等の天然スギも、必ずしも全部が良いとは言えない。
- 苗木は3～4号苗であれば十分である。いづれも植栽後の生長は大差が無い。
- 枝張りのがっちりした苗木が良いが、最近の苗木は一般に枝張りが小さい。しかし、ここ2～3年は良苗が得られるようになってきた。
- さし木苗は雪に強いと言う人と、弱いと言う人がいる。赤ざし苗は折れ易い。
- 秋田スギは生育が良く雪にも強い。従って、本県の品種との品種改良は考えられないか。
- 近年、地拵えのための伐採木が大型化し、労力と経費が大幅に増大している。
- 巻枯らしよりは伐った方が良く、散布地拵えも好ましくない。公社は全刈筋置き地拵えである。
- 斜め植えは活着が良く、また根元が太く育つために折れることが少ない。
- 公社では一時斜め植えを実施したが、労務問題や技術指導ができない等のため現在は実施していない。
- 植栽本数は2000～2500本/haが適切である。特にさし木苗は1500～1600本で十分である。
- 備蓄林を目的とする人は、下刈は実行するが除伐はしない。従って、当初から植栽本数は少なくして良い。
- 植栽本数は方位によって増減すべきだ。早く雪の消えるところは、植栽本数は多くても良い。
- 下刈作業は最も重要な保育作業だ。従って、下刈回数は年数によって決るべきでない。
- 一般に8～10回の下刈が必要だが、只見町では15～20年間下刈を行っている所もある。
- 雪起こしは5年位までやらない方が良い。
1年目から雪起こしをすると、どうしても立上がらない。公社では雪起こしはやっていない。
- 雪起こしをしなくても済む育林技術も必要だ。
- 枝打ちは、雪抜けして雪に耐えられるようになってから実施すべきだ。雪抜けする樹高は約4mであるので、この時期に胸の高さまで裾枝払いをした方が良い。
- 熱心な人ほど毎年枝打ちを少しずつ（50～100cm）実施している。
- 良質材生産（無節の柱材生産）とは違った枝打ち方法もあると思う。

- 早く雪抜けさせる、支持根を発達させる、年輪幅を一定にする、下刈を早く切り上げる等の理由から、会津地域は施肥が必要である。
- 経済性の追求よりも、造林地を成林させる技術の確立が先決だ。
- これまで造成された間伐手遅れ林分を、どのような方法でいかに間伐させるかが急務である。
- 労働者の大半は年寄りか女の人である。また、雇用労力は十分あるが必ずしも雇用できない。
- 材にはとびぐされや黒心が多く、材価に大きな影響が出ている。

以上の問題点を整理してみると、次の9事項に類別された。

- (1) 林業の経営目標は、どうあるべきか。(良質の柱材生産か、大径材生産か)。
- (2) 造林対象樹種はスギ以外に無いのか。(アカマツ、カラマツ、広葉樹等は)。
- (3) 適地適木に沿った造林の進め方はどうあるべきか。(大面積造林か、小面積造林か)。
- (4) 会津に適したスギ品種の開発とその活用を凶るべきでないか。(地スギ、天然スギ、その他)。
- (5) 会津に適した育苗方法は無いのか。(良質の実生苗・さし木苗の生産技術の確立)。
- (6) 造林方法についてはどうか。(斜め植えと普通植え、秋植えと春植え、植栽密度は)。
- (7) 保育方法はどうか。(下刈期間は、雪起こし方法は、林地肥培の必要性は、枝打ち方法は)。
- (8) 除伐と間伐方法については。(手遅れ林分の除間伐方法は)。
- (9) 保護上の問題は。(トビグサレ、黒芯は)。

IV おわりに

これらの問題点について総べてを解明するのは難しいので、容易に着手できる苗木問題を主体に、他は実態調査やアンケート調査により行った。